感じ乍ら、歩き心地よく耗つたこの下駄を、夏休みまでは穿きたいものだなどと思つたりして、静かに葉櫻の繁みの下蔭を辿つて行つた。

沈静の底より

三年　茂里子

「たう〳〵夏がまゐりましたのね、」さう親しい友への手紙を書き出して、私はそつと目をうつしました。雨がしと〳〵と、窓際のつげの木に降つてゐます。その生き〳〵した新芽にも、そして固い、くろずんだ幹にも、同じ様に緑の雨が静かに降つてゐます。

「この雨が晴れたらあの強い光の時が來るのだ。」かう思ひ乍ら、私は窓に手をかけて、やはり外を見つめてゐました。

かなめ垣の外を傘を傾けて、小さい女の子が通りました。庭たづみにゆら〳〵と振袖がうつると、紅と緑の浪がもつれあひました。お琴のお稽古にでもゆくのでせうか。紅い帶をきちんとおはさみにしめた後姿が、垣の角を右に曲ると、見えなくなりました。それで私は、

「私の窓の前にも夏が見えます。雨の中を小さい女の子が通ります。」と書いて、すぐ「紅い帶はいゝものですね。」とつゞけやうと、筆を執りました。その時ふと、私を呼びとめた、小さい、白い花の姿が瞳の中にたゞよふ緑と紅との上に、くつきりと浮んで來ました。

「何だらう。」かう思ふと、又書くのを止めて、私は窓から首を出してみました。

雨だれおちの所に雪の下が咲いてゐるのでした。小さい子のリボンのやうな花が、雨だれの響にふるへ乍ら咲いてゐるのでした。

きつと一日中雨が降つてゐれば、一日中この花はふるへてゐるのでせう。

私はもう手紙も何もかきたくありませんでした。誰かを呼びかけて、このふるへからひろがつて來る心のゆらぎを皆きいて貰ひたい、と思ひました。

「いゝえ、それでも私の望むすべてではない。」とうらぎる心の叫びが、遠く〳〵消えて行きました。と、いひしらぬ沈静の奥底から、「ほんとうの祈りの捧げられる時」といふ、細い、幽かな、清い、朗らかな囁きをきゝました。

みちばた

一年　善子

みちばたに、私といふものが此處に居るのです、とも何とも言はずに、小い草がそつと咲いて居る。

ともすれば、心ない人に踏まれても了ひさうなあぶないみちばたに、それでも、春の色を淡緑に見せて、可憐にふるへて居る。何と言ふ名か。知らぬ。植物學者の目にもとまらず、ただ塵にまみれて、花もつけずに、生きては枯れる名なし草ではあるまいか。小川のほとり、野の末に、生える小草を、あはれだと、人はいふ、心をとめる者もない往還に、そつと咲いて戰いて居る此の草を、何といはうか。あはれとは、あまりに輕い言葉である。電車の轟、荷車の音、雜然たる音響に、はげしく邊りは、動いて居る。さうして、だあれも、此の草を知らないのだ。草もだまつて、ひそ〳〵と生きて居る。

□　□　□

一年　かつ子

この間の晴れた日に、地理教室から直白な富士を鮮やかに見得た私は、九段を歩いてゐた時にふとその事を思ひ出した。九段から富士が見えると聞いてゐたので。

で、其の方角を見たけれども、雲ばかりである。今まではたゞ、今日も見えないなと、それ以上氣にも止めなかつたが、一度はつきりした姿をみた私はそれではすませなかつた。雲があるから見えない。あの雲がなければ！

いや雲のかなたに、富士は何時もあの姿であるのだと思つた。

◉笑顔

柊江

運動會の日であつた。

燒けつく樣な陽を受けて砂はぎら〳〵光つてゐた。

乾き切つたグラウンドへ水を撒く爲に年寄な小使が車を引きまわした。車が重いのでよぼ〳〵歩く樣子が可笑しいのか皆が一度にどつと笑ひ立てた。すると小使も同じ樣に一所になつて笑つた。質朴な無邪氣な善良な笑顔であつた。

私は涙の浮ぶのを感じた。